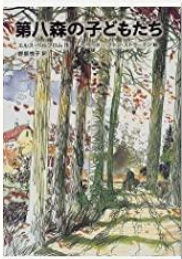


紙版 ハコブネ×ブックス vol.26

<https://hakobune.wp-x.jp>

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・YA作品を未来に語り継ぐ web サイトです。



第八森の子どもたち

De kinderen van het achtste woud.

作者 エルス・ペルフロム
翻訳者 野坂悦子
出版社 福音館書店
発行 2000年4月
ISBN 978-4834025231

review



第二次世界大戦末期のオランダ。東部の町アルナムで暮らしていた少女ノーチエは、ドイツ軍の侵攻により町を追われ、父とともに北へと逃れます。荒れ地を越え、二人がたどり着いたのは、森の中にある**農家クラップヘク**。この家の主人は広い心の持ち主で、多くの人々を助けていました。その博愛はドイツ軍の脱走兵にも、第八森の奥に隠れ住むユダヤ人家族にも注がれます。戦火はクラップヘクの周囲にも迫ります。ドイツ軍のV1ロケットが落とされ、空襲が行われ、ドイツ兵団の侵攻が始まります。物語はこの戦下の暮らしを十二歳のノーチエの目を通して細やかに描きます。激しい抵抗をするわけではないけれど、平和を願い、祈り、人としての誠意を忘れない。普通の人たちもまた、自分たちの暮らしや善意を大切に守り続ける戦いを続けていたのです。



彼の名はヤン

Er hieß Jan.

作者 イリーナ・コルシュノフ
翻訳者 上田真而子
出版社 徳間書店
発行 1999年3月
ISBN 978-4198609955

review



第二次世界大戦末期のドイツ。七歳の少女レギーネは、出征したソ連で行方不明となった父親のことを案じながら、母親と二人心細く暮らしていました。町に初めて空襲のあった夜、ポーランド人の青年ヤンと彼女は出会います。ドイツの占領下にある**ポーランドから強制連行**された、下等民族と蔑まれ働かされている人々。後ろめたさを覚えながらも、レギーネはヤンと隠れて会い、恋に落ちます。ヤンの過酷な体験を聞き、ドイツ人の罪を意識しはじめレギーネ。国家の裏切り者を告発することが正義であると信じていた彼女も、次第にこの戦争への考えを変えていきます。二人には危険が迫っていました。ドイツ人の女の子と関係を持ったポーランド人は、**強制収容所**行きか裁判もないまま**絞首刑**にされます。ただ一緒に生きたという願ひさえも踏みつぶされる。大きな悲しみがここに遺されます。

特集 侵攻を描く児童文学の意味

児童文学がこれまでどれほど戦争の悲惨さを訴え、平和への祈りと願いを物語にこめてきたか。今、ロシアのウクライナ侵攻の惨状を前にして、積み上げてきたものが、すべて水泡に帰したのだと無力感を覚えている方も少なくはないでしょう。物語など何の役に立つのか。他国の軍隊が自分の住む町や村を蹂躪する。事実の記録だけではなく、踏みつけられた人間の心の叫びを物語は繋ぎとめます。児童文学は、**侵攻される国の子どもたち**だけではなく、**侵攻した国の子どもたち**も、そして他国を制圧するためにやってきた兵士たちもまた**同じ人間である**ことを語りかけます。現実の戦争を前に児童文学はただ無力で無意味なものだったのか。侵攻の大義よりも、正当性よりも、大切なものがあります。物語によって読者の心に灯されたヒューマニズムは、いつか世界を変えます。**意味はあります。**まだここで諦めてはいけません。



アーニヤは、きっと来る

WAITING FOR ANYA.

作者 マイケル・モーパーゴ
翻訳者 佐藤見果夢
出版社 評論社
発行 2020年3月
ISBN 978-4566014527

review



第二次世界大戦下のフランス南西部の谷間の村レスキュンに暮らすジョーは十二歳。男たちは皆、出征し、村には老人と女性と子どもだけが残されていました。ドイツ軍の進撃により**フランス全土は占領**され、スペイン国境に近いこの村を通り亡命する人間を監視するためドイツ兵の守備隊がやってきます。この村に駐屯したドイツ兵は徴兵されたごく**普通の人たち**であり友好的ですが、彼らにも**軍人としての責務**があります。ジョーはフランス全土やポーランドから逃げてきたユダヤ人の子どもたちを秘密裏に逃がす活動に加わっていました。亡命の手助けをする者は**射殺される**。ドイツ兵を欺き、ユダヤ人の子どもたちを守るうとジョーは死力を尽くします。戦時下にあっても人としての理想と理性を失わない矜持を物語は浮かび上がらせてます。



トンヤンクイがやってきた

作者 岡崎でたか
出版社 新日本出版社
発行 2015年12月
ISBN 978-4406059534

review



盧溝橋での軍事衝突から火ぶたが切られた**日中戦争**。上海を制圧された中華民国軍は、蘇州を越えて南京に後退します。その道すじにある農村で家族と暮らす十歳の少年ツァオシン。やがて**トンヤンクイ(東洋鬼)**と恐れられる日本兵がこの村にもやってきます。銃撃とともに村には火がかけられ、ツァオシンは家族を失います。占領された村は、**略奪され暴力で支配**されますが、飢える農民や労働者たちは軍隊を結成し持久戦を始めます。ツァオシンも仲間たちと少年隊を作り、日本軍への抵抗を試みます。その八年の闘いに、東京に住む日本人の少年、武二の物語が並走します。**困っている中国の人たちを悪い兵隊から助ける日本軍の活躍**を誇らしく思う武二。戦争の現実、次第に少年の心にも疑問を抱かせます。平和を希求する見知らぬ二人の少年の心の共鳴が響き渡ります。

特集
戦争と平和を考える。

父親の仕事のためにシ
ンガポールで暮らすこと
になった現代の日本人少
年、朝芽(はじめ)は、か
つて**日本軍が占領してい
た時代に殺された人々**を
悼む記念碑の前に複雑な
気持ちを抱きました。やが
て戦時中を生き延びた男の亡
霊が現れ、**日本人への激
しい憎悪**を朝芽はぶつけ
られます。消えない過去
の事実と向き合い、何を
未来につなげていくべき
か。それを教えてくれる
物語がここにあります。

ハンクリーゴーストと
ぼくらの夏
(長江優子)
講談社 2014年

紙版「ハコブネ×ブックス」vol.26
2022年5月1日発行 ●発行人 きむらともお
事務系社員。趣味で児童文学紹介サイト ハコブネ×ブックス
(非営利)を運営しています。日本児童文学者協会第6回児童
文学評論新人賞佳作他、諸々を受賞。